体育学における人間学的論議とその教育学的基底の一契機

—Guardini, R. の教育学に基づいて—

阿 部 悟 郎

〈目　次〉

§1. 序　論
§2. 本　論
2. 1. Guardini,R.とその教育学的思考の段階性
2. 2. Guardini,R.の人間学的論議における第三の契機
2. 3. Guardini,R.の人間学的論議とその弁証法的ダイナミクス
2. 4. 体育学における人間学的論議の試み
—教育学的展望点の高みから—
§3. 結　語
§4. 註、および参考文献

1. 序　論

体育学が体育の本質論議を深めていく時、やがて必然的に人間学的な課題へと突き当たる。考えてみると、体育学にとって人間学的な問題は、永遠の課題であると言われて久しい[(1)]。ところが、日本の体育学研究の足跡を一瞥すると、そのような人間学的な問題を直接的に取り扱った研究は、数量的にみれば僅かであり、そこに確固たる問題領域が形成されているとは判断し難い。ただ、それはこれまでの体育学が、それを無思慮に放置してきたということではなく、むしろ、その人間学的な問題の困難性に起因しているのではないだろうか。実に、体育学がそれを必然的に問わざるを得ないにせよ、その学的営為は、決して容易なものではない。そうではあっても、その学的意義と有効性を真摯に想いなすならば、体育学はそれについて能動的に問題設定を試み、学的努力を積み重ねていかなくてはならない。そして、体育学がそのような人間学的な課題に対して、もし未だ確固たる有効な手だてを持ち得ないとするならば、差し当たり、他領域の有効な論理を模索し、そこに体育学の問題設定に照らして批判的吟味を施し、そこから有効な契機を抽出していくことが求められよう。そこで、体育の概念的基底が「教育」にあり、それが意味内容の形式を決定的に規定していることを勘案し[(2)]、ここでは教育学の領域に目を向け、そこに有効な人間学的契機を求めていきたい。

さて、体育学が人間学的課題に取り組むにあたって、教育学の知的体系を眺め、そこから人間学的論議を探し当てようとする時、教育への省察と人間理解は全く結びついており[(3)]、そこには原理的な連関さえも認められる[(4)]ことに気づかされる。従って、教育学の知識体系における人間学的契機とそれらの諸形式は、おそらく全く随所に散見されることとなろう。そして、そこに人間学的な問題設定がより自覚的・能動的、そして直接的な形式を模索するとき、そこにはドイツ教育学近代以降の、所謂、伝統的な陶冶論とそれを批判的に乗り越えることによって興った精神科学的教育学、さらには大凡それら

の流れに乗じて立ち興った教育人間学等の諸形式が映じてくる。無論、それらの学的諸形式の数々を一連の学的潮流として括るのは些か強引なことではあるが、そこには一貫して人間の存在や生成に対する高次な意識が窺われる。

そして、教育学におけるそのような人間学的論議は、人間存在における精神的生命それ自体の目的的・創造的性格を顧慮しながら、やがて実存主義哲学との対決や対話を通じてそれまでと異なった新たな方向に展開されていく。そのような人間学的論議の流れの中で、実存主義的な思考の世界を切り拓き、そして押し拡げ、より確かなものに向けて努力したのが、例えば、Döpp-Vorwald, H.やBollnow, O. F.等であり、そしてGuardini,R. 等である。そして、そのような試みは、教育学における人間学的な伸展と相まって、実り豊かに結実し[(5)]、やがて教育学における人間学的基盤の確立に資する実存主義的次元の視野を啓いていった[(6)]。従って、体育学が教育学における人間学的論議をより正しく汲み上げようとするならば、この辺りの人間学的論議についても、目を向けていく必要があろう。ここでは、その端緒として、Guardini, R.の人間学的論議を直接的な分析対象として取り上げ、検討を進めていくこととする。ただし、ここでも、かつてLangeveld,M.J.が警告したように[(7)]、体育学もそれを周到に吟味もせず、よそから無思慮に持ち込むことで事を済ませるような安易なことは避けなくてはならない。

これらから、本稿においては、体育学の学的確立の為に、教育学における人間学的論議、取り分けGuardini, R.の人間学的論議の分析を通じて、体育学における人間学的論議の教育学的基底の一端を模索したい。

2. 本　論

2. 1. Guardini, R.とその教育学的思考の段階性

Guardini, Romano.(1885−1968)の略歴は、別稿において既にその大凡を辿

っている。[8] 些か重複することとなるが、彼は、教育学者としてよりは、寧ろカトリック神学者・宗教哲学者として高名であり、その課題的関心は、キリスト教的実存の可能性と意義に向けられていた。[9] 彼はルネッサンス以降の近代精神とそれがつくりあげてきた当世の現実を透徹して見つめ、高い精神的視点に立ってその本質を鋭敏に分析しながら、尚も人間が進むべき道を指示する、稀なる肯定の思想家であるという。[10] そして、その思想は、所謂、「キリスト教的実存」として拡大されてゆき、やがて深まりや拡がり、そして新しさを得ていったのである。[11] Guardini, R.は、この「キリスト教的実存」の論理を武器に、教育学の論争へと参入していくこととなる。そこで、Guardini, R.の人間学的論議を段階的に辿っていくこととする。

Guardini, R.の人間学的論議は、まず人間存在の根本、あるいは人間存在の全体像の模索から始まる。やがて彼は自らの探究において、像『das Bild または Bild』という考え方に辿り着くのである。即ち、Guardini, R.によれば、像とは、人間の存在の根底にあって、その存在現象を根源的に規定する。[12] それは、無限の高まりを希う形成動機をそこに胎動し、それは、自らを貫き、そこへ到ろうと躍動し、似姿として真なる神の領野を希い、そこに迫りゆこうとその存在を突き動かすのである。それは高まりゆく上昇的な存在形成の可能性と言える。そして、存在形成によって得られた多様な契機はやがてそこに有意味に染み込み、その存在形成の可能性を豊かに耕し、そしてよりよく高めゆく。即ち、そのような高まりゆく存在形成の可能性の全体は、像として再構成され、その存在のうちに潜み、そこに秘められてゆく。この像のありようやその限界においてのみ、人々はその実存を成就し、多様な存在形姿をその存在に実現し得るのである。[13] それ故に、像とは、まさに人間の高まりゆく存在形成の可能性の統一的全体として考えられる。ここに、Guardini, R.の人間学的論議における基底をみることができるのである。

さて、Guardini, R.は、像論理によって、なるほど教育学における人間学的営為は確かな基底を得て、ようやくそこに全体性と根源的な統一性を得ることができるとしても、そこに内容的に確定的な内実を、先験的にその基準

として与えがちであり、それが為に、人間の存在形成の自発性を弱め、新たなものの生成を見失いかねないことを懸念する。[14] 人間の存在もそしてその生成と形成も、実際は、前述のように、神の思し召しに従い粛々と進みゆくような安易な道程ではない筈である。人間は、現実との厳しき対決においてこそ生の実質を営んでおり、決して無害な「真空状態」[15]において生を安穏と遂行している訳ではない。そればかりか、人間の存在も生も、そして実存も、その実はそれが最高の可能性と同時に極度の危険にも晒されているのである。[16] 従って、像が真の生きた像となるためには、その形式性に、豊かな意味を与える実質的な契機が必要とされる。[17] そこで、Guardini, R.は、像概念の形式性と静的規定性を補う為に、人間の存在と生成の動的規定を試みることとなる。[18]

先ず、Guardini, R.は、人間の存在やさらにはその人格現象を動的に認識するという構えをとる。[19] 先の通り、人々がそこで具体的実質的な生を送る現実世界は、決して無害なる真空ではあり得ず、そこには風雨も荒れ地も、そして自らに迫り来るものもある。人々はそのような世界において現存在を呈する。時には、豊かさを自らのうちに秘めつつも無為に浮遊していることもあるだろう。ところが、人々が、自己の主導性から生きようとする時、それ自体として構築し主導性を有する他者や、それ自体のやり方で存在している諸々の事物と出会い、そして状況と遭遇し、そこに邂逅Begegnungが生じる。[20] そして、その時、人間存在は人格として立ち現れるのである。[21] 即ち、現世の具体的・歴史的状況において神の似姿としての像は、邂逅においてようやく人格として世界に峻立し、その存在を主張するのである。それが人格的実存である。

このように邂逅がもたらす生成は、それまでそこに育まれつつも決して知り得なかった自己の人格的実現をもたらす。即ち、そこにおいては、たとえ何らかの形で予感していたとしても、決して明確な意識を払っていなかったような新たな存在局面がそこに湧き出るのである。[22] まさに邂逅はまだ見ぬ自己に光を当ててくれる。それによって人間は存在のうちなる深まりにある泉

から新たなるものが湧き出で、そして輝く。そこにおいてこそ、人間は自らの豊かさの一端を正しく検証し得るのである。

このような邂逅とそこにおける検証という人格的実存の論議は、先の像概念の形式性と静的規定性を補う、人間の存在と生成の動的規定と言える。[23] ところが、このような邂逅の論理は、確かに人間の生成と形成の本質を規定する重要な契機であるとしても、その一回性の瞬間的決定性によって、人間の存在や生成の全体性を分断し、それらが非連続的な原子へと破壊されるおそれもある。[24] 従って、この契機は先の像の契機との相補的な関係によってこそ有効となる。[25] そこで、Guardini, R.は、次のように述べた；

「教育的に本来的なものは、まさにあれらの規定体系の双方の弁証法的な交点にある。それはある単一の概念をもって捉えられるのではなくして、寧ろ双方の概念の対置からのみ見えてくるのである。[26]」

これに従えば、先の像という思考方法と邂逅という思考方法を弁証法的に対置することによって、人間の生成の実質がより正しく見えてくるのである。これを、Guardini, R.は、「生ける生成の第一の弁証法」と呼ぶ。[27] それはまさに生成する個体の同一性が自己の可能性から自己の現実性へと広がりゆくさまを映し出してくれる。[28]

さて、この第一の弁証法により、人間の存在とその生成の実質の一端が描かれていくこととなる。ところが、それはあまりにも個人中心的に過ぎ、主観的・内在的な欠点があるという。[29] Guardini, R.は、次のように述べる；

「自己自身の中に閉じたそのような（抽象的な）人間およびその人間の本質形態などは存在しない。それとともに人間の生成に前もって与えられた内容などは存在しない。あるのはただ生成する人間であり、そして事物を伴った現実の時空界に過ぎない。[30]」

なるほど人間の存在と生成は、閉じた内在的主観性において進みゆくものではなく、寧ろそのような内在的主観性と外界の現実性との相互交渉においてこそダイナミックに展開していくものなのかも知れない。それこそが人間の存在と生成のアクチュアルな姿を如実に映し出していると言えよう。人間の存在とその生成も自らの内に閉じてはいないのである。考えてみれば、堅強な内的完結性に自閉的に留まることなく、現にある可能性を超えて伸展してゆく為には、外在的な契機が必要となる。

そこでGuardini, R.は、教育の本質の最終的・決定的規定を結論付けるにあたって、先の第一の弁証法だけでは不充分であることを思念し[31]、その弁証法的交点の対立項に、新たな第三の「教育的に本来的なるもの」の規定を加えるのである[32]。果たして、それは「対象Gegenstand」であった[33]。

2. 2.　Guardini, R.の人間学的論議における第三の契機

「対象」それは、先の「生ける生成の第一の弁証法」においては、「像実現の素材」として、「像を満たしうる正しい対象として」また「出会いの対象」として、常に人間の為に存在するものとして考察の隅に置かれていた感が否めない[34]。ところが、人間の生の現実においては、「対象」は寧ろ即自的に価値を有し、人間存在に従属することなく自己目的的に存在している。そして、それは否応なく人間の存在へと対決を迫り、態度決定を要請する。Guardini, Rは、そのように自己に対決を迫るものを「対象」と呼ぶのである[35]。それは例えば、理念や規範、そして価値といった、それが何か重要であると感じるからではなくそれ自体の正当性故に価値あるものから、所与の現実、例えば事物やものごとの過程、人間関係等そこに存在するものや出来事までをも含む[36]。即ち、それは、生成しゆく個体の自己構成のための素材ではなく、自らにおいて妥当する理念、価値、規範から、無生物、人間、歴史、文化、人間関係、汝としての神に至る全ての現実であり[37]、超個人的なものの全体である[38]。実に、人々は多様な「対象」の中に存在し、そこにおいてこそその生成の実質をおし進めている。

ところが、それを「対象」として認知し得るには、相応の前提が必要となる。従って、人々がよき生成を遂げ、高まり至った時に、ようやくそれを意識することができるのかも知れない。Spranger, E.の言いまわし[39]を借りるならば、高まりゆく自己に次第に育まれていく価値感受性と価値形成力によって、人間はようやくそこにある「対象」に気づき、そしてそれと対峙していく。そして、「対象」とのこのような対峙においてこそ、人間は、ようやく自らを実現することができるという。Guardini, R.は述べる；

「私は私に対置して存在しているもの、例えば事物、人間、理念、仕事そして課題に向かって、私を超えていく時にのみ、生き生きと私自身を実現することができる。そして、私は、対象に向かっている時にのみ、そして自らの生の内容を遂行する時にのみ、またはそれに直面し、そこで、そしてそこから生きるときにのみ、私は私自身に生成することができるのである。[40]」

即ち、人間は無為に生を送っているだけでは自己を遂げることができず、「対象」と対峙し、自らを証す中で、ようやく真の自己が実現されるのである。従って、人々が自己を実現する為には、「対象」と向き合う能動的な決断が要請される。それでは「対象」は、人間に対してどのように対決を迫ってくるのであろうか。実に、「対象」は人間に対して取り入れられることを要求するのである。[41]自己の外にあり、そして即自的に展開している「対象」は、人間に対してその自己の内的世界に欠落した価値を突きつけ、その存在の維持や保持に決定的な危機をもたらす。それは、人間の存在の自閉的な内部完結性に対して価値付与的な契機を与えてくれる。従って、この場合、「対象」の持つ本質や意味を適確にしかも深く把握することが大切となる。[42]そして、その「対象」が要求するものを素直に理解し、「対象」の要求に真面目に従属することが意味を持ってくる。[43]Guardini, R.は、それを献身Dienstとして描き出す。[44]「対象」に対する献身は、人間の存在とその生成に何かをもたらしてくれるのである。Guardini, R.は述べる；

「それの人間の生成に対する特有な成果は、本質の充実、生の実質的な充実である。[45]」

人間は、「対象」への献身によって、その存在の本質が充たされ、高次な可能性へと再構成されていく。人間は、「対象」を純粋に自己の世界に取り入れることによって、自らの自閉的な存在維持を超えて高まりゆく[46]。即ち、「私」が「私」を「対象」の中に与えることの中に、「私」が「私」から目を転じ「対象」の中で「対象」のために生きる中に、「対象」の持っている価値的な力が作用し、それによって「私」の中で新たな「何か」が生じ、「私」は新たなる「何ものか」になりゆくのである[47]。従って、人間はそのような外在的契機によってこそ内的主観性を突き破り、外へと可能性を伸展していくことができる。換言するならば、人間の存在とその生成は、「対象」との関わりにおいて、外へと開かれていくのである。Guardini, R.は述べる；

「それが私のうちにおいて『何ものか』になることを通じて、私が『何ものか』になる。決定的な出来事は、それが直接欲されない時にのみ起こる。それはただ対象への帰依においてのみ起こる。決定的な価値は、無私、即ちそれ自体や私性への執着を捨てることにおいてのみ実現されるのである[48]。」

従って、「対象」への献身は、翻ってそこへの没頭の中から何かが生じ来る、極めて創造的な営為と言えよう。即ち、何かに無心に打ち込み、そこで精進を重ねることによって、ようやく新たな自己が生じ出て、それがその存在に実現され、そして人間は高まりゆく。人間は、「対象」への献身においてそこに自己とは異なる独自なものを見抜き、それまでの偏狭な自己を棄て、自己の外に自己を開示することによって、自己の本質の偏狭さと一面性が除去され、新たな自己が生ずる[49]。「対象」の独自な本質、自分のそれと異なる本質に触れ、感動することによって自らの本質の狭さと偏りが取り除かれ、さらにはそれを真に自分のものとすることによって、新たな自己が生じ

出るのである。[50] そして、それは人間の視野や精神の拡充をもたらしてくれる。[51] 即ち、「対象」への献身によって、存在の内なる本質が耕されていく。それは、先の「生ける生成の第一の弁証法」即ち、内在的主観的な生においては得ることができない、極めて有効な契機なのである。[52]

ところが、「対象」が如何に人間の生成に対して有効であるとしても、それらが人間に対して直接的に有用であるという保障は、必ずしも「対象」自体の中には存在しないが為に、それが無私の献身であればあるほど、その受容によって混乱と破壊をもたらす危険をも併せ持つ。[53] そればかりか、そこには「対象」の多様性によって「私」が別々に引っ張られ、やがては自己喪失に陥る危険もある。[54] 人々は、「対象」との対決において、常にそのような喪失や混乱、壊滅の危険に投げ込まれているのかも知れない。それでは、何が人間をそのような危険から守ってくれるのであろうか。

それは、「対象」の対立項である、先の「生ける生成の第一の弁証法」にあるものであるという。[55] 即ち、人間がよき対象を能動的に選択し得る内在的主観的要素であり、まさに「現存在を支える基底」であり、それは「最後の支え」である。[56] そのような生き生きとした選択は、高まり至った存在形成の可能性から主導的に発せられる創造的自由であり、それは諸対象の混沌から、人間にとって正しい価値ある対象の選択を行わしめる。[57] 即ち、人間には存在を支える支柱や基底があり、真の決断はそこからなされる。[58] それは、「私」における生き生きとした内的中心、内的法則、そして「対象」に対する生き生きとした選択原理であり、[59] より具体的には、人間の創造的行為を充分に可能ならしめ、また人間の自発的活動に対して本質的な自由を与えることのできる人間生命の内的法則である。[60] 高まり至った存在形成の可能性は、眼の開かれた存在として、事物の被造物性を見抜き、その本質を見抜くことができ、それによって人間は、そこから尽きることない豊かさを、つまり永遠の神性を汲み取ることができるのである。[61]

即ち、「対象」の選択は、高まりゆく像、即ち内なる神性に委ねられる。従って、「対象」はその本質が神の啓示との深い結びつきにおいてのみ有効

であるという[62]。そして、人間は、「対象」への献身によってやがて高まり、究極的には神の世界へと入ることになるのである[63]。これによって、人間は、対象との関わりにおいて神の啓示へ導かれ、それを通じて内なる自己が高まりゆく。このように考えるならば、なるほど、人間は、その存在の基底においてやはり神の被造物であり、神の似姿であり、そして神に呼びかけられた存在である[64]。ここで、Guardini, R.の次のような比喩が想起させられる。即ち、「私は生きている。それにもかかわらず私の中に私ではないキリストが生きている[65]」。これに依拠するならば、人間の生を規定し導くのは、やはり神の啓示と言える[66]。

ところが、現世において「対象」は神の恩寵の秩序から逸脱したものも多く、それらが人間を脅かしもするが、そのような危機と脅威の中にあっても、人間はその「対象」の中に雄々しく入り込み、その特質を我がものにしなくてはならず、それによってのみ、はじめて自己自身の真の新生を勝ち取ることができる[67]。そのような対象との関わりは、それまで決して持ち得なかった契機を像に与えてくれるのである[68]。ここにおいて、対象の問題は像の問題へと入り込む。従って、「対象」の論理は「像」の論理を前提としてのみ成立する。考えてみれば、「対象」の論理は一見して脈絡のない断片的な現象のように見えるが、実はそうではない。Guardini, R.は、次のように述べる；

「人間は実存主義者がみたようなもののままではない。実存主義者によれば、『人間にはなんらの前提も本質も規範もない。人間は絶対的に自由であって、それが行動においても存在においても自己を規定している。場も秩序もないところに投げ出されて、人間はただ自己のみであって他には何もない。そして人間の生は、徹底的に自己の運命である。』という。

これは真実ではない。人間には本質があって、それが人間にある力を与えている。このことは次のように言い得る；即ち、私はまさに本質であり、そしてある力なのであると。またそこには秩序があって、そこにはある力がある。このことは次のよ

うに言い得る；即ち、私は今ここにいて、所与の実質的な連関のなかにいると。全世界や周囲の世界という我々を取り囲むものがあり、それが人間を脅かすと同時に、また人間を支えるのである。[69]」

「対象」に自らを預け入れ、あたかも運命に身を委ね、行く末に与らないかのような賭けとは異なり、危機との対峙における創造的な自由は、やがて創造的な克服をもたらす。確かに「対象」は、人間を脅かしもするが、その存在と生成を創造的契機として支えてくれる。即ち、人間は、所与の状況における「対象」との対決において仮にうち負かされたとしても、やがてはそれを乗り越え、そして内的に高まりゆくことができる。人間は脅かされたままでは終わらない。そこには常に創造の自由が胎動しているのである。なるほど、あたかも人間を脅かすかのように対決を迫り来る「対象」も、それによって自らに欠落したものを補い得る有効な契機を孕むが為に、翻って人間の存在と生成を支えてくれるのである。即ち、そこにはそれを乗り越え、高まりゆく、そのような勇猛な前進がそこにある。従って、Guardini,R.は、実存主義思想の意義を高く評価しながらも、その無神論的実存主義の「空虚な冒険主義」的傾向の限界を見極めたのである。[70]

このように「対象」とは、人間の生成にとって確かに重要な契機の一つである。人間の生成はこのような外在的な契機によってこそ、ようやく高まりゆく道程として描かれ得ることであろう。そして、人間は、そのような生成の道程の途上においては、常に、神に呼びかけられた存在として、その存在に、内に育ちゆく神を顕現させる積極的努力が課せられているのdである。[71]人間はそれによって本来的自己である「キリスト教的実存」へと到達することができる。[72]即ち、神の似姿としての像が人格態をとり、現世において神を実現する。そのようにして、人間の存在形成の可能性は、次第に高まり、やがては神へと接近していくのである。Guardini, R.は、ここに教育学的に重要な第三の契機を認めるのである。[73]そして、それは先の「生ける生成の第一の弁証法」という内在的・主観的契機に超越的・客観的契機として弁証法的

に対立関係をとることとなる。[74] それは、Guardini, R.の示した先の命名方法を踏襲するならば、「生ける生成の第二の弁証法」と呼んで差し支えないことであろう。[75]

2. 3. Guardini, R.の人間学的論議とその弁証法的ダイナミクス

さて、これまで辿ってきたように、Guardini, R.は、教育学的に本質的な契機を「像」と「出会い」、そして「対象」として導き出した。そして、彼は、それらの相互の関係を最終的な弁証法[76]と銘打つ。ここで、彼のいう弁証法そのものが問題となってくる。実のところ、彼の弁証法は、所謂、哲学史上において慣用されているヘーゲルの流れにあるものではなく、それは寧ろ最終的調停性というよりはロマン主義的止揚を許さない対立における緊張的な統一を形成するものであるという。[77] 即ち、彼の弁証法は、第三の超越的契機への止揚統合ではなく、二者の対立構造を指している。[78] そして、この対立とは、その都度二つの契機が互いに排斥しつつも統合し、それどころか相互に前提しあっているような関係であり、[79] 言うなれば、Guardini, R.の弁証法という試みは、そこで導き出された三つの契機に内在する相応の限界を補う為のものでもある。[80] Guardini, R.は、次のように述べる；

「一方は他方の生き生きとした批判をつくりあげ、その危険性を明示する。また一方は他方にその基礎を与えてくれる。しかしそれは、各々がなるほど質的にはそれ自体の中に存在しているが、かといってお互いから独立しているわけではない。それらは寧ろ、一つのより深い統一へと関連していること、いわば二つの構造の対立を通じてのみ把握されるような深い統一、つまりそれ自体が直接的にではなく『弁証法的』にのみ理解されるのである。[81]」

そして、人間の生はそこに立ち現れる二重の対立構造にこそある。即ち、「生はこの二つの側面の中でのみ、そのように何やら二面的なものとしての

みありうる[82]」という。従って、Guardini, R.の弁証法をより適正に把握しようとするならば、彼の「対立Gegensatz」概念をも踏まえなくてはならない[83]。Guardini, R.は次のように述べる；

「対立という考え方は、閉じられた体系ではなく、眼の開かれた存在、そして生き生きとした存在における一つの内的方向を意味している。それは、現実界がある空間として立ち現れ、我々はそこにおいてこそ自らを失うことなく超越しゆくことができ、人間はそこでこそ充たされるのである[84]。」

このような弁証法という対置によって、ようやく真に具体的・全体的な人間形成をより適確に論じ得ることとなるのである[85]。即ち、 Guardini, R.は、それらの三つの契機からなる二重の弁証法的関係を対置し、それを同一次元において統一的に扱うことによって、教育学的に本来的なるもの、即ち究極的な教育学的認識を捉えようとするのである。Guardini, R.は、次のように述べる；

「教育学的に本来的なるものは、弁証法的な連関の展望点にこそあり、それは『対象』と『献身』という契機に対する新たな弁証法的連関において立ち現れる二重の関係において生き生きと見えてくるのである。なにやら不明瞭な特性を伴いつつも、次のように述べることができよう。即ち、教育の内在的な契機は、『像』と『出会い』の対立に自己を構成しながら、それを超えた超越的なもの、つまりは『対象』とそれへの『帰依・専心』に対立している。重ねて、教育学的に本来的なるものは、そのような系列の展望点にある。それを理解することによって、究極的な教育学的認識が得られるのである[86]。」

ところで、この展望点からあの三つの契機とそれらの連関を統一的に見渡せるとしても、それだけでそれらの相互の関係の具体的様相が規定される訳ではない。それは重要な問題であり、実際、当時の教育学界では、そのよう

な統一方法において、おのおのの契機を等価に扱うか否かといった問題が立ち起こり、とりわけDöpp-Vorwald, H.とKlafki, W.の間で論争が巻き起こったという[87]。その論争の詳細については、ここで立ち入る余裕はないが、何れにせよ、それらの論議の内発的な勃興の事実は、Guardini, R.によって導かれたそれらの契機が、教育学において、とりわけ人間の存在と生成の論議において極めて重要な意味を有することの正当性を裏付けるものとして理解される[88]。これら三つの契機の取扱いについて、Guardini, R.自身は次のように述べている；

「描き出された三つの立脚点は、その都度、三つの構造契機に依拠されることとなる。それらは、三つの教育学的な可能性を表現するのである。

ただ、それらはそれ自体で可能なのではない。そこにはそれ自体の限界に起因する不可能性が含まれている。各々は、他の契機に対する対立を必要としている。

とはいっても、それらの何れかに重点を置くかについては自由である。

『像』の概念に重点を置くのか、あるいは『出会い』に、または『献身』に置くのか、それは決断にかかっている。それによって、存在と世界の構造が異なってくる[89]。」

中立的な理論構成は、差し当たり、三つの契機が相対的に対置されながら、調和が保たれている状態を想定するべきであろう。しかしながら、それらは、その強調関係に即応して再構成されていく。何れかの一つを強調した教育学的認識はあり得るのである。しかしながら、それは何れにせよ何らかの形で他の契機を含まなくてはならない。ここでそこに立ち映る眺望の広がりは、あれらの三契機を各々の点とする三角形の連関に描かれていく。これによって、三角形の底面は、「生ける生成の第一の弁証法」を底辺とし、「生ける生成の第二の弁証法」を高さとして構造化される。それは、まさに三つの契機から成る三角形であり、双方の対立依存関係をも明示する。そして、底面の三点とそれらの連関を正しく展望できる点を頂点とした三角錐が形成

されることとなる。これによって、教育的に本質的なるものが、展望点を頂点とする三角錐として素描されていく[90]。そして、前述の如く、それらの三つの契機の何れかを強調することによって展望点の位置が相違し、異なった全体的調和のもとに、その都度、新たな三角錐が構築されていく。しかし、それが三角錐を構成する以上、何処に重点を置こうとも、必然的に他の二つの契機を随伴し、それらに少なからず依存することとなる。これによってこそ、人間の具体的な生の全体性が明瞭に映し出されてくる。ここに到って、Guardini, R.の「教育的に本質的なるもの」の規定は完成するのである[91]。

Guardini, R.の明示したこのような広大な理論は、現実世界との関連の中で無限を志向して生きる有限なる人間の現実を、まず根底から捉え、その存在と生成の本質を一歩一歩探究しつつ構築した手堅い理論である[92]。これを踏まえるならば、彼の教育学は、生ける人間の生成の実質を、三つの契機の相補対立を正しく展望することによって、誠実に描き出してくれたと言えよう。

さて、これまで辿ってきたGuardini, R.の教育学における特有で決定的なもの、即ち人間の生とその生成における重要な契機は、概ね次のように段階的に纏められるであろう。まず、人間はその存在において多くの要素を有するとしても、その存在の内にはそれらに人間存在における意味連関と位置付けを付与し、そこに統一性を与える像がある。人間は像によってこそ、その存在に実質的な生を形成することができ、実存の諸局面は、その可能性の範囲においてこそ成就され得る。ところが、人間は、決して真空状態において生きている訳ではない。時には実存をも脅かすような一回性の状況においてこそ人間の存在と生成の実質はある。人間は、そのような一回性の状況との出会いにおいて、自らをその可能性と共に開示し、その豊かさを証さなくてはならない。そのとき、人間は、内なる豊かさの人格態として世界に峻立し、その存在を主張する。これが人格的実存である。ところが、人間は、その生をおし進める現実世界において、個々の存在とは無関係に存在する多様な「対象」によって取り囲まれており、それらが決断を迫り来る。「対象」

は、即自的で独立的に価値を有するものであり、その価値が欠落した人間を脅かしもする。そこで、人間ができることは、対象への献身であり、無私の没頭である。それによって、対象に内在する特有の即自的な価値が受容され、存在形成の可能性は耕されていく。換言するならば、対象とのよき関わりによって、自らの存在のうちなる像は耕され、高まりゆく。確かに、それは、自らの存在と生をかけたある種の闘いであるかもしれないが、「対象」に献身し、没頭し、それによって自らがようやく検証されると共に、それによって自らに豊かさが贈与されるのである。そして、人間は自らを耕しゆき、やがては神の領野へと到るような生成の道程を勇猛に前進しゆく。現世において人間に与えられた課題は、神性の人格的実現、即ちGuardini, R.の謂に従うならば、「キリスト教的実存」となる。ここにGuardini, R.が述べるような、神に呼びかけられた存在としての人間の存在とその生成の真意を見ることが出来るのである。人間の存在とその生成は、決して予定調和的に、そしてロマンティックな連続過程において進行するものではなく、寧ろ、所与の現実との非連続的な闘いとこれまた非連続的な対象からの贈与、そしてそれらによってようやく可能となる像の崇まりによって可能となる、生成の道程の勇猛な前進の途上として捉えられなくてはならない。それらの全体像は、まさに「生ける生成の第一の弁証法」と「生ける生成の第二の弁証法」の対立を構造化する三つの契機の展望点にこそ映し出される。[93] この展望点こそが、Guardini, R.が求めていた「教育的に本来的なもの」と本質的契機なのである。Guardini, R.は、述べる；

「ここにのみ、教育学的に本質的なるものの規定を論ずることができるのである。[94]」

従って、このようにしてGuardini, R.が描き出した弁証法的な緊張・連関の展望点に映じてくるものは、まさに予定調和ではない勇猛なる克服的・前進的生成である。[95] 即ち、人間は、現世の風雪の中で対象に身を献じ、あるいは対象と闘いながら自らの豊かさを証し、そのようにして自らの内なる存在

形成の可能性を耕し、そして螺旋的に高まりゆく。何ものかに成ることで自らの豊かさや真なるものを知り、それによって、また新たな可能性がそこに芽生え出る。そのようにして進みゆく人間の勇猛なる前進的・克服的生成にこそ、Guardini, R.の、所謂、肯定の思想の基盤を認めることができるのかも知れない。これによって、人間がまさに勇猛に前進していく、生成的な存在であることに想い至らされていくのである。

さて、Guardini, R.のこのような人間学的な見解は、当世のドイツ教育学におけるいくつかの論議との親和性を見ることが出来なくもない。ただ、Guardini,R.は、人間の存在と生成をより徹底して見つめ、それらを神学的な人格主義に還元し、そこから人間の存在と生成の肯定[96]を静かにそして敬虔に語っているのではないだろうか。そこにこそ、彼の教育学的な意義が認められるものと思われる。確かに、その後の実存主義的な教育学においては、類似した論議をより先鋭的に深め、ある種の冒険主義的な論議が湧き起こっていくのであるが[97]、Guardini, R.の人間学的論議については、それが極めて実存主義的でありつつも、そこには円やかな暖かみが感ぜられてしまう。そして、それが些か神学的でありつつも、人間の存在と生、そしてその生成を透徹と見つめ、その悲劇的様相から目を逸らさず、そこからさえも生の有効な契機を読み取り、それを人間学的論議において語り出してくれる。それは、まさに人間の存在とその生成の神秘の一端を読み解く、示唆深い教育学的なファンタジーとして捉えられるように思われる。

2. 4. 体育学における人間学的論議の試み
——教育学的展望点の高みから——

体育学がその学的認識において人間を問い、それを探究していく時、やはり先ずその目に映じてくるのは、走ったり、跳んだりといった身体運動現象であろうか。まさしくそれは、生命現象に還元し得るという点で生物的な存在形式として、あるいは特定の形式に枠付けされた身体操作様式という点で文化的な存在形式としても捉えられ得ることであろう。ところが、このよう

な人間学的認識は存在現象の多様性を統一性において把握し得るが、そこにある存在形成のダイナミクスを見極めるのが難しい。人間の存在は、その生成と共に常に動的である。彼らの身体運動現象も、現実の世界において生成された存在形象の可視的な一端であり、それを見極める為には、存在と生成のダイナミクスを正しく読み取らなくてはならない。従って、体育学における人間学的論議においても、人間の存在とその生成の実質を、Guardini, R. の人間学的営為に基づいて、より適正に論じていく必要があろう。

先ず、体育事象に立ち現れては移りゆく身体運動現象も、それが人間の存在形成の一形式であることを思いなせば、それを可能たらしめる存在形成の可能性の問題へと辿り着く。無から有は生じにくい。せいぜい極論したところで、混沌から有が生じると言い得る程度であろう。従って、疾走したり、遠投したりといった身体運動の諸相も、実は偶然、彼らの存在に舞い降りてくるものではなく、うちなる存在形成の混沌の全体から実現されてくるものである。華麗なボールコントロールは、相応の存在形成の可能性なしには生じないことであろう。42.195kmを2時間19分台で駆け抜ける女性の疾走も、彼女がそれまでつくりあげてきた存在形成の可能性の混沌から実現するのである。それは多様な要素が染み込んでいる統一的全体であり、存在のうちにあって彼らをその存在の本質に導いてくれる。スポーツ的な自己実現もその成就の瞬間である。

ところが、そのような豊かな自己実現が内なる存在形成の可能性に原因するとしても、おそらく自らの豊かさは自分ではわからない。その存在の内に豊かな像が育っていることは、平板な日常性においては気づく術がない。ところが、内なる像が豊かに育ちゆけば、やがて体育事象の現実世界にある多様な事物や状況、人格等を「対象」として認知できるようになる。即ち、育ち到った豊かさこそが、そこにある外界物に秘められた神性を感知し得るのである。そして、その時にこそ邂逅は訪れるのである。単なる事物との物理的な接触や他者との交流は、それだけで邂逅をもたらすものではなく、育ち到った内なる豊かさにこそ邂逅は降臨する。従って、体育事象においても邂

逅はあり得る。崇高な指導者との出会い、山岳活動との出会い、危機との出会い、特定状況との出会い、そして仲間との出会いは、育ち至った豊かさという内的準備状況にこそ訪れる。少なくともそれのよさを感知し得る程度にまで高まった豊かさがなければ、それらは単なる物理的な接触に留まってしまう。そうではなくて、邂逅は、育ち至った豊かさに、極めて決定的な衝撃を与え、その存在の根幹を揺るがす。それはある種の危機であり、存在がそのまま存続し得るか否かが問われる。そこにおいて彼らは自らの豊かさを証さなくてはならない。そこに代替不能な瞬間における人格的実存が成就するのである。

そうではあっても、それは彼らの存在と生成に対峙し、決断を迫り来る。即ち、それらは「対象」として彼らに迫り、存在形成の決断を迫ると共に、秘められた価値をもってそれの受容をも迫る。例えば、体育において行われるスポーツ活動も、ある意味では自己決断の連続であることが多い。スポーツ的現実にあって、迫り来るものに自らを証さなくてはならないこともある。そのままでは自らの主導性が脅かされ崩壊してしまうかも知れない。そこで自らの真なるものを証し、「なにものか」に成ることによって、それを創造的に克服し、自らの存在の主導性を保つことができる。彼らは、スポーツ活動においても、自らの存在の内に欠落している何ものかに脅かされながら、そこに身を献じ、没頭することで、その価値契機を受容し、内なる存在形成の可能性を耕し、そして高めゆく。

即ち、体育事象においても、彼らはそこに迫り来る「対象」によって外在的契機を受容しながら、内部完結的循環を超えて高まりゆくことができる。そこにあるスポーツを知り、実質的なスポーツ的人格態を知りながら、そこに秘められたる価値契機を獲得しながら、彼らはより豊かになりゆくことができることであろう。そのようにして高まり至った存在形成の可能性の混沌は、更に高次な人格的実存の成就を可能にするとともに、さらによき「対象」を感知し、それによってさらに自らを高めゆく可能性を拓いてゆくのである。それが、あたかも螺旋的な上昇であるならば、人間の存在と生成は、

なるほどGuardini, R.の比喩にもあるように、諸々の戦いを経て次第に高まりゆく勇猛なる前進の途上にあると言えよう。彼ら一人ひとりが、そのような自らの独自の生成の道程の途上にある。体育もそこに関わりを有する重要な領域であることを思念しながらも、その有効性と可能性を慎重に、そして謙虚に見極めつつ、彼らの代替不能な生成の道程を暖かく見つめていかなくてはならない。Guardini, R.の示す三角錐の展望点に立ったとき、体育学における人間学的論議は、そのように想い到らされていくのである。

3. 結　語

体育学がその学的認識において体育の本質を問い、それを誠実に追求していくと、どうしても人間学的問題に突き当たってしまう。そして、体育が教育であることの根幹を問うほどに、体育学が問題として追究しなくてはならないものは、寧ろ人間それ自体なのではないかとさえ、思わされてしまう。ここに体育学における人間学的な問題設定が発生するのである。即ち、それは純粋な哲学的営為としての人間学的問題ではなくて、体育学的な視野における人間学的問題であるという点において、独自の意味を有するように思われる。換言するならば、それは体育学的思考における人間学的問題設定であり、純粋な哲学的営為としてのそれとは全く同値であろうはずがない。

この意味において、体育学における人間学的問題は、どこまでいっても体育学的な問題であり、その過程において推論・検討の素材を他領域の有効な知見に求めるとしても、最終的には体育学的な解決へと向かわなくてはならない。ただし、このことは他領域の知的契機に対して、直ちに体育学的説明様式の構築に資する直接的な有用性が要請されることを意味しない。そうではなくて、体育学的問題としての人間学的問題をより正しく探究していく為に、何よりも既知の人間学的論議に広く学び、それによってその人間学的な思考能力を培い、そしてそれを高めていかなくてはならないのである。本稿において直接的な分析対象として扱われたGuardini, R.の人間学的論議につ

いても、それが現実の体育事象に生起する諸々の現象を普く説明し尽くすことができないとしても、その思考の足跡を辿りながら、体育学における人間学的思考能力を耕すことに繋がりゆくのではないだろうか。従って、それが有効なのであれば、体育学は、Guardini, R.からも多くを学ばなくてはならない。否、Guardini, R.のみならず多くの人間学的論議を対象化することによって、体育学は人間学的思考の確かな内実を得ることができるのではないだろうか。体育学における人間学的論議は、おそらくそのような状況にある。そして、そうすることによって蓄積された人間学的認識の総体に立ったとき、ようやく体育学は体育の何たるかを正しく語り始めることができるように思われる。

4. 註、および参考文献

(1) 川村英男（1966）体育原理，体育の科学社，p.75.

(2) 佐藤臣彦（1985）体育概念における範疇論的考察，筑波大学体育科学系紀要，8：17−18.

(3) Flitner, W.（1970）Allgemeine Pädagogik, Ernst Klett Verlag, S.13.

(4) Genner, B.（1974）Einfü hrung in die Pä dagogische Anthropologie, Wissenschaftliche Buchgesellschaft,S.18.

(5) 皇紀夫（1983）実存思想と教育，村田昇（編）教育哲学，東信堂，p.116.

(6) 平野智美（1968）教育活動の人間学的基礎—実存哲学を中心として—，上智大学教育学心理学論集，3：38.

(7) Langeveld, M. J.（1965）Einführung in die theoretische Pädagogik, S.60.

(8) 拙稿（2001）体育学における人間学的視座の一方向とその基礎的契機の有効性—Guardini, R.の教育学を中心として—, 中央学院大学人間・自然論叢, 13：40−41.

(9) Kuhn, H.（1961）Romano Guardini. Der Mensch und das Werk, Kosel Verlag, S.66.

(10) 平野智美（1974）グァルディーニ，杉谷雅文（編）現代のドイツ教育哲学，玉

川大学出版部，p.284.

(11) 平野智美，ibid, p.285.

(12) Guardini,R.（1959）Grundlegung der Bildungslehre, Werkbund Verlag, S.23.

(13) Guardini,R., ditto, S.23.

(14) Guardini,R., dittio, S.34.

(15) 境沢和男（1960）教育における実存の問題の視点，教育哲学研究, 2：21.

(16) Guardini,R.（1950）Das Ende der Neuzeit, IM Werkbund Verlag, S.118.

(17) 平野智美, op.cit.,（10）, p.294.

(18) Guardini,R., a,a,O.,（12）, S.34.

(19) 平野智美（1960）グァルディニーにおける教育学の基礎構造，教育哲学研究，2：71.

(20) Guardini,R., a,a,O.,（12）, S.31

(21) 平山久美子（1979）R.グァルディーニの陶冶理論における対立（Gegensatz）概念の意義について，上智大学教育学研究，p.14.

(22) Guardini,R.（1969）Die Begegnung, Guardini,R.・Bollnow,O.F.（Hrsg.）Begegnung und Bildung, IM Werkbund Verlag, S.14.

(23) Guardini,R., a,a,O.,（12）, , S.34.

(24) Guardini,R., dittio, S.35.

(25) 平野智美, op.cit.,（19）, p.72.

(26) Guardini,R.,a,a,O.,（12）, S.36.

(27) Guardini,R.,ditto, S.10.

(28) 桜井佳樹（1989）理念なき時代のビルドゥングーグァルディーニのビルドゥング論における「弁証法」の問題，教育哲学研究，60：32.

(29) 平野智美, op.cit.,（19）,p.73.

(30) Guardini,R., a,a,O.,（12）, S.29.

(31) 平山久美子, op.cit.,（21）, pp.22−23.

(32) 桜井佳樹, op.cit.,（28）, p.34.

(33) Guardini,R., a,a,O.,（12）, S.37.

(34) 桜井佳樹, op.cit.,(28), p.34.

(35) Guardini,R., a,a,O.,(12), S.37.

(36) Guardini,R., dittio, S.38.

(37) 桜井佳樹, op.cit., (28), p.34.

(38) 平野智美, op.cit.,(19), p.300.

(39) Spranger, E. (1922) Lebensformen−Geisteswissenschaftliche Psychologie und Etik der Personalichkeit, Max Niemeyer, S.338.

(40) Guardini,R., a,a,O., (12), S.10.

(41) 平野智美, op.cit., (19), p.73.

(42) 平野智美, op.cit., (10), p.297.

(43) 平野智美, op.cit.,(19), p.73.

(44) Guardini,R., a,a,O., (12), S.39.

(45) Guardini,R., dittio, S.41.

(46) 平野智美, op.cit., (19), p.71.

(47) 桜井佳樹, op.cit., (28), p.34.

(48) Guardini,R., a,a,O.,(12), S.41.

(49) 平野智美, op.cit.,(10), p.297.

(50) 杉谷雅文 (1960) 人間観の変遷と現代教育学, 教育哲学研究, 2 : 9.

(51) Guardini,R., a,a,O.,(22), S.17.

(52) 平野智美, op.cit.,(19), p.74.

(53) 平野智美, ibid, p.74.

(54) 平山久美子, op.cit.,(21), p.22.

(55) 平野智美, op.cit., (19), p.74.

(56) 平野智美, op.cit.,(10), p.298.

(57) 平野智美, op.cit., (19), p.74.

(58) 平野智美, op.cit., (10), p.298.

(59) 平野久美子, op.cit.,(21), p.22.

(60) 平野智美, op.cit.,(19), p.74.

(61) 平山久美子, op.cit.,(10),p.25.

(62) 平野智美, op.cit.,(10), p.300.

(63) 平野智美, op.cit.,(19), p.74.

(64) 平野智美, op.cit.,(10), p.293.

(65) Guardini,R., a,a,O.,(12),S.37.

(66) 平野智美, op.cit.,(10),p.298.

(67) 平野智美, ibid, p.300.

(68) Guardini,R., a,a,O.,(22), S.14.

(69) Guardini,R., a,a,O.,(16), S.87.

(70) 平野智美, op.cit.,(10), p.298.

(71) 平野智美, op.cit.,(19), p.70.

(72) 平野智美, op.cit.,(10), p.300.

(73) 平野智美, op.cit.,(19), p.73.

(74) 平山久美子, op.cit.,(21), p.22.

(75) 桜井佳樹, op.cit.,(28), p.34.

(76) Guardini,R.,a,a,O.,(12), S.43.

(77) 平山久美子, op.cit.,(21), pp.17−18.

(78) 桜井佳樹, op.cit.,(28), p.37.

(79) 桜井佳樹, ibid, p.38.

(80) 平野智美, op.cit.,(19), p.71.

(81) Guardini,R., a,a,O.,(21), S.34.

(82) Guardini,R. (1955) Der Gegensatz−Versuche zur einer Philosophie des Lebendig Konkreten−, Matthias−Grünewald−Verlag, S.91.

(83) 桜井佳樹, op.cit.,(28), p.38.

(84) Guardini,R., a,a,O.,(82), S.211.

(85) 平野智美, op.cit.,(10), p.296.

(86) Guardini,R., a,a,O., (12), S.44.

(87) 桜井佳樹, op.cit., (28), pp.35−37.

(88) 桜井佳樹, ibid, pp.30−31.

(89) Guardini,R., a,a,O., (12), S.44−45.

(90) 平山久美子, op.cit., (21), p.23.

(91) 桜井佳樹, op.cit.,(28), p.35.

(92) 平山久美子, op.cit., (21), p.23.

(93) Guardini,R., a,a,O., (12), S.44.

(94) Guardini, R., dittio, S.45.

(95) Guardini, R., dittio, S.34.

(96) 平野智美, ibid., op.cit., (10), p.299.

(97) 平野智美, ibid, p.289.